

心身障害児の判定・処遇指針に関する 追跡的調査研究

(関東学院大学)

吉 沢 英 子

(神奈川県児童医療福祉財団)

大 井 英 子

(全国療育相談センター)

孤 嶋 圭 子

(小児療育相談センター)

佐々木 正 美

(全国特殊教育推進連盟)

下 田 巧

(中央愛育園)

杉 井 正 二

(湘南心理教育センター)

中 一 郎

(東京都立光明養護学校)

林 友 三

はじめに

昭和52年度から3か年間に及ぶ調査研究で全国療育相談センター開設以来52年度に至る1095ケースを①来所当時の相談資料を分析しその傾向をつかみ②その1095ケースを母集団として、質問残記入法による調査用紙を郵送し記入後返送、回収率58.9%、その結果分析を行った、③さらに当センター利用者の地区的分布分析を試み、来所児の多い地域を三か所選定、その地域内の障害児の親、74ケースにインタビューを行った。④それに加えてその地域内の専門機関として福祉、教育、医療、その他個人に対し郵送による質問紙記入法による当センター認知度、紹介したケースとの関係及現在のかかわり方などの調査を行った。283ヶ所を対象として、回収率は47.9%で福祉関係の回収率が最も高く54%であった。

今回の報告は、これらの前回までの調査分析と関連させ、またその結果をふまえながら総合的にコメントを加えつつまとめたい。この諸調査研究の目的は、障害児のある年齢時における診断判定に基づいて療育指針を得て後の状況把握、経年的な変化にともなって表面化してくる問題点を、障害児自身による個人要因、障害児をめぐる家族要因、家族をふくめて地域社会とのかかわり上問題と

なる社会要因の側面から検討しその実態を把握することにあつた。またその実態把握とあわせて総合的診断機関としての当療育相談センターのあり方、今後の課題について明らかにすることを目的としている。即ち、コミュニティ・ケアを推進していくための具体的な資料として、福祉、教育、医療の密接な関連性を保持し、トータルな処遇展開の発端を見出したい。

尚、52年度、53年度に報告した内容を省き障害児の親に対する調査結果を次のクロスの柱立てによって分析した要約と専門機関を対象にした調査結果分析を加えて紙数の許される範囲で述べることにする。

- ①障害児自身の自立度＝障害児の家庭外自立度によって周囲の手のかかわりの如何が明確になる。(個人要因との関連)
- ②父親の障害児に対する世話の自発性によって分類した。これは母親にとって自発的に障害児の世話をしてくれる夫は、協力度の高い夫としての存在である。(家族要因との関連)
- ③母親の性格を積極群と消極群に分けた。これは、母親が親の会以外のグループ活動をしている場合積極的な性格の持主と考え、何の趣味的、社会的活動もしていない、内にこもりがちな母親の性格を消極的性格又は消極的生活態度の持主とした。(家族要

因との関連)

④地域社会が障害児に対して、いかなる反応を示しているかについての母親の判断をみたものである。地域社会が障害児に対して受入れていると感じ又受入れる姿勢ありと回答したものを好意群とし、その対比として非好意群とした。(社会的要因との関連)

1. 障害児の特性

当センター来所時の1095ケースについてみると精薄718, ダウン症による精薄45, 自閉的傾向272, 脳性マヒ182, てんかん287, 微細脳損症37, 言語発達遅滞85, 運動発達遅滞34, 視覚あるいは聴覚障害78, C. P. 以外の肢体不自由38, 身体発達遅滞10, 筋疾患及び心臓循環器障害28, 情緒障害24, 行動異常19, その他の障害71, 正常10, 不明1となっている。その中単独障害37.6%, 重複障害61.4%で, 重複のなかで最も頻度の高いのが精薄である。

これらの障害児の親に対する調査では, 現時点において身辺処理の自立度の困難なものは, ①着衣41.9%②家庭外移動50.0%, ③脱衣55.5%, ④食事62.1%となっており, 表1～5に示すように家庭外移動の自立度の低いものは, それが自立しているものに比して, 他の身辺自立度が有意に低い傾向を示している。

また障害児にとっての深刻な事柄としては表6にみる如く, 年齢に関係なく第1位にことばの問題, 第2位には知能の問題, 第3位には社会性的の問題が浮彫りにされていることが明らかである。さらに表7に示すように, 障害児にとって最も必要な事は, 表6との対応でみると第1に年齢不問で言語指導があげられ, 若干のズレはあるが次に生活指導, 遊び仲間となっている。注目しなければならないのは9歳～12歳の場合に, 地域住民の障害児に対する理解の必要という指摘がある。これはその年齢に達すると行動範囲や活動が

表1 家庭外移動の自立度と食事の自立度との関係

食事の自立度 移動の自立度	自立	やや介 助必要	かなり 介助 必要	全面的 介助	N・A	合計 (%)
自立	230 (84.6)	37 (13.6)	5 (1.8)	—	—	272 (100.0)
非自立	103 (39.9)	77 (29.8)	33 (12.8)	44 (17.1)	1 (0.4)	258 (100.0)
計	333 (62.8)	114 (21.5)	38 (7.2)	44 (8.3)	1 (0.2)	530 (100.0)

表2 家庭外移動の自立度と着衣の自立度との関係

着衣の自立度 移動の自立度	自立	やや介 助必要	かなり 介助 必要	全面的 介助	N・A	合計 (%)
自立	167 (61.4)	84 (30.9)	17 (6.3)	3 (1.1)	1 (0.4)	272 (100.1)
非自立	55 (21.3)	86 (33.3)	41 (15.9)	75 (29.1)	1 (0.4)	258 (100.0)
計	222 (41.9)	170 (32.1)	58 (10.9)	78 (14.7)	2 (0.4)	530 (100.0)

表3 家庭外移動の自立度と脱衣の自立度との関係

脱衣の自立度 移動の自立度	自立	やや介 助必要	かなり 介助 必要	全面的 介助	N・A	合計 (%)
自立	206 (75.7)	55 (20.2)	9 (3.3)	1 (0.4)	1 (0.4)	272 (100.0)
非自立	91 (35.3)	68 (26.4)	33 (12.8)	64 (24.8)	2 (0.8)	258 (100.1)
計	297 (56.0)	123 (23.2)	42 (7.9)	65 (12.3)	3 (0.6)	530 (100.0)

表4 家庭外移動の自立度と排尿の自立度との関係

	自立	やや介 助必要	かなり 介助 必要	全面的 介助	N・A	合計 (%)
自立	237 (87.1)	31 (11.4)	2 (0.7)	—	—	272 (99.9)
非自立	111 (43.0)	53 (20.5)	27 (10.5)	66 (25.6)	1 (0.4)	258 (100.0)
計	348 (65.7)	84 (15.8)	29 (5.5)	68 (12.8)	1 (0.2)	530 (100.0)

表5 家庭外移動の自立度と家庭内移動の自立度との関係

家庭内移動 家庭外移動	自立	やや介 助必要	かなり 介助 必要	全面的 介助	N・A	合計 (%)
自立	272 (100)	—	—	—	—	272 (100.0)
非自立	144 (55.8)	57 (22.1)	29 (11.2)	27 (10.5)	1 (0.4)	258 (100.0)
計	416 (78.5)	57 (10.8)	29 (5.5)	27 (5.1)	1 (0.2)	530 (100.1)

表6 年齢別にみた障害児にとっての深刻な事柄

順位	年齢(歳)	0～6 (N=108)	6～9 (N=229)	9～12 (N=120)	12～15 (N=46)	15～ (N=41)
1	位	ことばの問題 (N=35)	ことばの問題 (N=59)	ことばの問題 (N=38)	ことばの問題 (N=13)	ことばの問題 (N=10)
2	位	知能の問題 (N=20)	知能の問題 (N=43)	知能の問題 (N=27)	社会性の問題 知能の問題 各 (N=7)	その他 (N=7)
3	位	運動の問題 (N=9)	社会性の問題 (N=35)	社会性の問題 (N=17)		社会性の問題 知能の問題 各 (N=6)
4	位	排泄の問題 社会性の問題 各 (N=6)	排泄の問題 (N=19)	情緒の問題 その他 各 (N=8)	おちつきのなさ の問題(N=4)	特にな (N=3)
5	位		その他 (N=18)		運動の問題 その他(N=3)	

※無回答を除く上位5位まで

表7 年齢別にみた障害児にとって最も必要なこと

年齢(歳)	順位	0～6 (N=108)	6～9 (N=229)	9～12 (N=120)	12～15 (N=46)	15～ (N=41)
	1 位	言語指導 (N=30)	言語指導 (N=53)	言語指導 (N=37)	言語指導 (N=8)	生活指導 言語指導 各 (N=6)
	2 位	生活指導 機能訓練 遊び仲間 各 (N=14)	遊び仲間 (N=43)	生活指導 (N=21)	生活指導 遊び仲間 各 (N=6)	
	3 位		学習指導 (N=31)	心理治療 (N=18)	その他 特にな い 各 (N=5)	
	4 位		学習指導 (N=26)	心理治療 地域住民の障 害児に対する理 解 各 (N=6)		学習指導 医学的治療 各 (N=5)
	5 位	学習指導 (N=9)	機能訓練 (N=21)			医学的治療 機能訓練 各(N=4)

※無回答を除く上位5位まで

拡大してくるために、地域との接触が多くな
ってくることと関係が深いといえよう。

2- 障害児をめぐる家族関係

当センター来所時の場合の家族タイプをみ
ると二世帯世帯の核家族が最も多く71.6%、
三世帯が24.0%となっている。全国平均の核
家族世帯64.0%、その他22.2%より高い率を
示している。尚家族の規模も比例して4人構
成が45.7% 5人構成が19.3%で、全国平均家
族数3.4人より大きいことがわかる。さらに
障害児の同胞間の位置は、末子が42.5%、長
子27.0%、一人っ子22.0%である。

これらの家族状況下にある調査時点におけ
る父親の障害児に対する世話の状況を表8で
みてみると、子どもの年齢が12歳～15歳の場

合父親の協力度が最も低い、逆に表9の父親
の年齢でみると40歳～45歳で低く、30歳～35
歳、50歳以上が協力度は高くなっている。表
10の父親の職業別をみると、公務員の場合に
時間的余裕のあるためか協力度が高くなって
いる。また父親の協力度と子どもへの接触時
間の長さとは関係が深い結果があらわれている。

次に家族全体として障害児に対する世話の
程度は、表11にみるように父親の協力43.4%
に比して家族全体では28.3%と低率を示して
いる。このことは、母親が障害児をかかえて
いるために家族にマイナスの要因となってい
るのではないかと気にしている率の高いこと
と一致している。とくに障害児の同胞の将来
に対するマイナスを気にしている。これらの
事実から、前述の父親の協力度の如何が母親

表8 障害児の年齢別にみた父親の本児に対する世話の程度（協力度）

協力度 年齢(歳)	1.自発的に世話してくれる	2.頼めば世話してくれる	3.あまり世話してくれない	4.全く世話してくれない	N・A	合 計
0～6	40 (46.3)	41 (38.0)	8 (7.4)	2 (1.9)	7 (6.5)	108 (100.1)
6～9	107 (46.7)	79 (34.5)	22 (9.6)	6 (2.6)	15 (6.6)	229 (100.0)
9～12	48 (40.0)	41 (34.2)	20 (16.6)	1 (0.8)	10 (8.3)	120 (99.9)
12～15	14 (30.4)	14 (30.4)	13 (28.3)	1 (2.2)	4 (8.7)	46 (100.0)
15～	17 (41.5)	13 (31.7)	—	2 (4.9)	9 (22.0)	41 (100.1)
計	236 (43.4)	188 (34.5)	63 (11.6)	12 (2.2)	45 (8.3)	544 (100.0)

協力群
(N=236)

非協力群
(N=263)

表9 父親の年齢と障害児に対する世話の程度（協力度）との関係

協力度 年齢	25歳～ 30歳未満	30歳～ 35歳未満	35歳～ 40歳未満	40歳～ 45歳未満	45歳～ 50歳未満	50歳以上	N・A	合 計
協力群	3 (1.3)	41 (17.4)	74 (31.4)	68 (28.8)	32 (13.6)	13 (5.5)	5 (2.1)	236 (100.1)
非協力群	5 (1.9)	47 (10.3)	99 (37.6)	71 (27.0)	41 (15.6)	11 (4.2)	9 (3.4)	263 (100.1)
計	8 (1.6)	68 (13.6)	173 (34.7)	139 (27.9)	73 (14.6)	24 (4.8)	14 (2.8)	499 (100.0)

表10 父の職業

協力度 職業	自 営 業	会 社 員	公 務 員	そ の 他	N・A	合 計
協力群	58 (24.6)	115 (48.7)	41 (17.4)	15 (6.4)	7 (3.0)	236 (100.1)
非協力群	61 (23.2)	140 (53.2)	30 (11.4)	21 (8.0)	11 (4.2)	263 (100.0)
計	119 (23.8)	255 (51.1)	71 (14.2)	36 (7.2)	18 (3.6)	499 (99.9)

表11 障害児の年齢別にみた家族の本児に対する世話の程度

世話 年齢(歳)	1.自発的に世話	2.頼めば世話	3.あまり世話してくれない	4.全く世話してくれない	N・A	合 計
0～6	31 (28.7)	53 (49.1)	14 (13.0)	8 (7.4)	2 (1.9)	108 (100.0)
6～9	59 (25.8)	130 (56.8)	27 (11.8)	4 (1.7)	9 (3.9)	229 (100.0)
9～12	38 (31.7)	60 (50.0)	13 (10.8)	1 (0.8)	8 (6.7)	120 (100.0)
12～15	14 (30.4)	27 (58.7)	5 (10.9)	—	—	46 (100.0)
15～	12 (29.3)	15 (36.6)	1 (2.4)	2 (4.9)	11 (26.8)	41 (100.0)
計	154 (28.3)	285 (52.4)	60 (11.0)	15 (2.8)	30 (5.5)	544 (100.0)

表12 母の面倒見と障害児の年齢

面倒見 子どもの年齢(歳)	1. よ い	2. 普 通	3. あまりよくな い	N・A	合 計
0～6	63 (58.3)	36 (33.3)	1 (0.9)	8 (7.4)	108 (99.9)
6～9	116 (50.7)	57 (24.9)	—	56 (24.5)	229 (100.1)
9～12	62 (51.7)	47 (39.2)	—	11 (9.2)	120 (100.1)
12～15	20 (43.5)	22 (47.8)	—	4 (8.7)	46 (100.0)
15～	18 (43.9)	12 (29.3)	1 (2.4)	10 (24.4)	41 (100.0)
計	279 (51.3)	174 (32.0)	2 (0.4)	89 (16.4)	544 (100.1)

表13 母親が子どものことで特に望むもの（障害児の年齢別による）

望 む もの 年 齢 (歳)	1. 子どもの 症状や見通 しについて 知りたい	2. 障害(児) のことで相 談・指導し てくれる専 門家がほし い	3. 障害児に 対する社会 一般のより よい理解が ほしい	4. 障害児の ための施設 ・設備がほ しい	5. 障害児の ために友達 がほしい	6. 障害児の 世話を援助 してくれる 人がほしい	7. 親同士で 話し合える 場や機会が ほしい	8. 家族の協 力や理解が ほしい	9. そ の 他	N・A	合 計
0～6	19 (17.6)	16 (14.8)	25 (23.1)	30 (27.8)	5 (4.6)	3 (2.8)	2 (1.9)	—	6 (5.6)	2 (1.9)	108 (100.1)
6～9	32 (14.0)	38 (16.6)	68 (29.7)	31 (13.5)	20 (8.7)	5 (2.2)	1 (0.4)	1 (0.4)	25 (10.9)	8 (3.5)	229 (99.9)
9～12	10 (8.3)	11 (9.2)	45 (37.5)	27 (22.5)	8 (6.7)	3 (2.5)	3 (2.5)	1 (0.8)	8 (6.7)	4 (3.3)	120 (100.0)
12～15	10 (21.7)	6 (13.0)	11 (23.9)	12 (26.1)	2 (4.3)	—	—	—	2 (4.3)	3 (6.5)	46 (99.8)
15～	—	3 (7.3)	3 (7.3)	21 (51.2)	2 (4.9)	—	—	2 (0.9)	7 (17.1)	3 (7.3)	41 (100.1)
計	71 (13.1)	74 (13.6)	152 (27.9)	121 (22.2)	37 (6.8)	11 (2.0)	6 (1.1)	4 (0.7)	48 (8.8)	20 (3.7)	544 (99.9)

の家族に対する気がねの度合に関係することがわかる。つまり、家族ぐるみの対応の必要性を物語っているといえよう。要するに母親の情緒的安定度を高めることが必要である。表12は、母親自身の障害児に対する面倒見に関する自己評価であるが、年少時の方が若干評価が高くなっている。表13は母親が障害児のことで最も望む内容を示したものであるが、最も高いのが一般社会の理解を求めるものが多く27.9%、次いで施設や設備とするものが22.2%となっている。したがって障害児をもつ母親にとって社会一般の理解がいかに重要かということがわかる。子どもの年齢と

の対比でみると、15歳以上の子どもをもつ母親の場合、社会一般の理解よりも施設及び設備を望んでいる。これは義務教育終了にともなう子どもの将来の生活との関係で、親にとっては切実な願いとなっている。これはインタビューの場合に感情とともに如実な表現となって訴えていたことから明らかである。

また表14で、父親の障害児に対する世話の協力度が、母親のどのような面にどの程度影響を及ぼしていくかをみると次のようなことが云えよう。父親(夫)の協力度がよい母親の場合、現在のままの夫としての役割で満足しているものが、協力度の低い夫をもった母親

表14 父親の協力度と母親の父親に対する役割への期待との比較

内容 協力度	1.障害児 の世話介 助	2.家族の 世話介助	3.精神的 支え理解	4.稼いで くれるこ と	5.雑務処 理	6.その他	7.現在に 満足	N・Y	合 計
協 力 群	11 (4.7)	4 (1.7)	67 (28.4)	14 (5.9)	1 (0.4)	11 (4.7)	126 (53.4)	2 (0.8)	236 (100.0)
非協力群	30 (11.4)	5 (1.9)	140 (53.2)	20 (7.6)	2 (0.8)	16 (6.1)	44 (16.7)	6 (2.3)	263 (100.0)
計	41 (8.2)	9 (1.8)	207 (41.5)	34 (6.8)	3 (0.6)	27 (5.4)	170 (34.1)	8 (1.6)	499 (100.0)

表15 母の年齢とサークル等の活動の関係

年 齢 サークル等の会	25歳～ 30歳未満	30歳～ 35歳未満	35歳～ 40歳未満	40歳～ 45歳未満	45歳～ 50歳未満	50歳～ 55歳未満	55歳以上	N・A	合 計
入っている (積極群)	7 (6.1)	30 (26.1)	42 (36.5)	22 (19.1)	7 (6.1)	4 (3.5)	1 (0.9)	2 (1.7)	115 (100.0)
入っていない (消極群)	25 (7.6)	113 (34.3)	98 (29.8)	50 (15.2)	19 (5.8)	7 (2.1)	6 (1.8)	11 (3.3)	329 (99.9)
計	32 (7.2)	143 (32.2)	140 (31.5)	72 (16.2)	26 (5.9)	11 (2.5)	7 (1.6)	13 (2.9)	444 (100.0)

よりも高くなっている。逆に協力度の低い夫をもった妻である母親は、精神的支えや理解を夫に強く求めていることがわかる。この結果からもわかるように、夫の態度が妻に大きな影響力をもつことが明らかになっている。つまり障害児への母親の対応姿勢にかかわりがあることを示している。

したがって母親の生活態度や性格の積極性が求められるのであるが、障害児をもつ母親はどうしても消極的になりがちである。あるいは逆に積極性の非常に強い母親もあり極端である。表15にみるように、諸種のサークル活動や社会的かかわりの頻度の高い母親を積極群とし何もしていない母親を消極群とすると35歳～40歳が最も活発で36.5%、次いで30歳～35歳の26.1%となっている。またその関連で表16の車の運転の有無にも積極群の方が有意になっていることがわかる。今回のインタビュー調査に協力してくれた障害児家庭74ケースの中、前回の質問残記入法による調査にも協力したケースが、その半数の34ケースある。その母親の状況をみると積極群に属するケースで、親の会の仲間に対しての心のや

表16 母親の性格と子どもとの外出等のために自分で車を運転するしない

運転する か 性格	は い	いいえ	N・A	合 計
積 極 群	52 (45.2)	60 (52.2)	3 (2.6)	115 (100.0)
消 極 群	91 (27.7)	226 (68.7)	12 (3.6)	329 (100.0)
計	143 (32.2)	286 (64.4)	15 (3.4)	444 (100.0)

すらぎを感じている回答が明確に出てきている。したがって母親のパーソナリティや生活態度によって障害児への対応姿勢も相異が出てきており、それが地域社会への浸透度、障害児の社会性の発達にも何らかの影響を与えることになる。そして当センターでの診断を受入れる際の状況と相まって、以後の療育展開にも関係が深くなっているのではなかろうかと思われる。

3. 障害児の居住地域生活をめぐる課題

報告書の冒頭に説明しておいたが、クロス

の柱立の一つである地域社会の受入れ状況、母親の意識状況によって異なるが、地域に受け入れられている感じをもっているものを好意群とし、マイナスの意識をもっているものを非好意群として分けてその傾向を考察してみた。表17によるとその受けとめ方に差が出ている。非好意群で中部、東北が目立っている。好意群はやはり東京都に多く地域的に干渉のないこと、及び相互連帯の稀薄さもあらわれているのではなかろうか。表18によって年齢別でみると好意群は30歳～45歳に多くみられるが非好意群では35歳～50歳と多少年齢のズレがあらわれている。表19、表20によると、好意群の母親は、家族の協力度も高くなっており、父親(夫)の仕事に対してマイナスと感じているものは、非好意群に多くなって

表17 地域社会の障害児に対する受けとめ方
(母親の評価)と地域差

地域の態度 順位	好意群 (N=161)	中 立 (N=302)	非好意群 (N=61)
1 位	東 京 都 (N=48)	中 部 (N=99)	中 部 (N=19)
2 位	関 東 (東京都を除く) (N=42)	関 東 (東京都を除く) (N=77)	関 東 (N=13)
3 位	中 部 (N=37)	東 京 都 (N=73)	関 東 (東京都を除く) (N=12)

いる。全くマイナスと評価していないものが好意群に44.7%，非好意群では19.7%と少なくなっている。これは、母親の性格の消極群と関連が濃くなっていることがわかる。

次に障害児をめぐる特に望むことに対しての比較をみると、表21に示すように第1位は両群ともに社会一般の理解をあげているが非好意群は相談指導の専門家を求め第3位に子どもの症状や見通しに対してのはっきりした目安を求めていることがわかる。また子どもの友人を求めていることから、社会性に関係した事柄をあげている。したがって地域内近隣に相談できる機関又はキーパーソンの必要性を示唆しているといえよう。地域社会内の既存の機関、施設の機能を積極的に活用する方向が求められていることが、調査結果から明らかになっている。前述したが福祉、教育、医療・保健関係の相談機関などの機能を発揮できるような働きかけと準備及びP・Rが必要ではないか。また当療育センターと地方自治体の関係機関との積極性に富んだケア網を考慮する必要もあらうかと思われる。

4. 療育相談機関（センター）のあり方とその課題

まず、関係機関、施設職員 130 名（福祉75 教育23、医療16）について全国療育相談セン

表18 母親の年齢と地域社会の障害児に対する受けとめ方（母親の評価）

年齢 地域の態度	25歳～ 30歳未満	30歳～ 35歳未満	35歳～ 40歳未満	40歳～ 45歳未満	45歳～ 50歳未満	50歳～ 55歳未満	55歳以上	N・A	合 計
好意群	13 (8.1)	42 (26.1)	58 (36.0)	28 (17.4)	9 (5.6)	4 (2.5)	1 (0.6)	6 (3.7)	161 (100.0)
中 立	18 (6.0)	97 (32.1)	98 (32.5)	48 (15.9)	20 (6.6)	7 (2.3)	6 (2.0)	8 (2.6)	302 (100.0)
非好意群	—	4 (6.6)	26 (42.6)	18 (29.5)	8 (13.1)	3 (4.9)	2 (3.3)	—	61 (100.0)
合 計	31 (5.9)	143 (27.3)	1 (34.7)	94 (17.9)	37 (7.1)	14 (2.7)	9 (1.7)	14 (2.7)	524 (100.0)

表19 家族の協力度と地域社会に対する母親の受けとめ方

協力度 地域の態度	1.自発的に 世話	2.頼めば世 話	3.あまり世 話してく れない	4.全く世話 してくれ ない	N・A	合 計
好 意 群	55 (34.2)	49 (30.4)	15 (9.3)	9 (6.0)	33 (20.5)	161 (99.9)
中 立	86 (28.5)	117 (38.7)	26 (8.6)	18 (6.0)	55 (18.2)	302 (100.0)
非好意群	18 (29.5)	19 (31.1)	8 (13.1)	6 (9.8)	10 (16.4)	61 (99.9)
合 計	159 (30.3)	185 (35.3)	49 (9.4)	33 (6.3)	98 (18.7)	524 (100.0)

表20 地域社会に対する母親の受けとめ方の違いによる障害児が父親（夫）の仕事に与えるマイナス度の評価

マイナス度 地域の態度	1.非常にマイ ナス	2.少しマイナ ス	3.あまりマイ ナスになると 思わない	4.少しもマイ ナスになると 思わない	N・A	合 計
好 意 群	4 (2.5)	31 (19.3)	49 (30.4)	72 (44.7)	5 (3.1)	161 (100.0)
中 立	13 (4.3)	60 (19.9)	116 (38.4)	104 (34.4)	9 (3.0)	302 (100.0)
非好意群	7 (11.5)	19 (31.1)	21 (34.4)	12 (19.7)	2 (3.3)	61 (100.0)
合 計	24 (4.6)	110 (21.0)	186 (35.5)	188 (35.9)	16 (3.1)	524 (100.1)

表21 地域社会に対する母親の受けとめ方の違いによる障害児をめぐる特に望むこととの比較

望むもの 地域の態度	1 子どもの 症状や見 通し	2 相談・指 導の専門 家	3 社会一般 の理解	4 施設 設備	5 友 達	6 援助して くれる人	7 話し合え る場・機 会	8 家族の協 力・理解	9 そ の 他	N・A	合 計
好 意 群	21 ③	16 ⑤	39 ①	38 ②	10	7	3	2	18 ④	7	161
中 立	39 ④	42 ③	85 ①	72 ②	19	3	3	2	26 ⑤	11	302
非好意群	8 ③	11 ②	25 ①	8 ④	7 ⑤	1	—	—	1	—	61
合 計	68 ④	69 ③	149 ①	118 ②	36 ⑥	11 ⑧	6 ⑨	4 ⑩	45 ⑤	18 ⑦	524

ターに対する認知度をみると次のようである。「療育の窓」48.5%，職場関係の友人・知人から，また講演会に参加した折の資料によるもの42.5%となっており，専門職員は存外に視覚によるものが多くなっていることに気付く。即ちセンターには一度も来所したことのない職員がその60%を示めている。当療育相談センターを紹介した理由をみると，総合診断が得られるから64.6%，著名な専門家の相談が受けられるから27.7%，地域内に機

関がないから13.1%となっている。母親のセンターへの動機と一致しているが，当センターに来所する以前に2～3か所の医療・相談機関を経てきているケースが多く年齢も3歳～6歳が多い。これらは表23にも示されているように，相談・情報の提供を希望しているものが39.0%，機関・施設職員に多いこととあわせて考慮する必要があるのではなかろうか，次に当センターを利用した障害児の母親及びケースを紹介した職員の反応を大雑把に

くくってみると表22の如く、内容に対してより積極的な希望をあげているものが、機関職員、母親ともに多くなっている。とくに機関職員に70.2%と高率を示していることがわかる。不満としているものは、母親の方に多く51.6%となっている。その内容をひろってみると母親では、診断中に関する事柄たとえば、①診断期間が長すぎる、②診断の結果が各科まちまちでイライラする、③将来の見通しがつかない、④あいまいな結果に対する不満、⑤歯科に関するものがその主なもので37.9%、次いで、センターの宿泊施設、設備に關

表22 全国療育相談センターに対する反応

項 目	関係機関施設職員		センター利用障害児の母親	
希 望	104	70.2%	56	43.8%
感謝のみ	17	11.5	6	4.7
不 満	27	18.2	66	51.6

※当該設問に回答した者のみ。

する内容で、①医師の常設、②食事の改善、③入浴にすることが19.0%、また申込みをしてから実際に診断の受けられる期日に関するものも20.2%ある。さらに主観的な感情的な不満として診断・相談の当事者に対する事柄もあげられている。機関職員の場合は、診断結果に関する不満が63.6%と最も多くなっている。母親の場合、障害児の年齢の14歳～15歳に多く、教育及び進路相談の充実を願っているものもあることは、今後のあり方として一考を要するのではないと思われる。

表23にみられる当療育相談センターに対する積極的な希望として自由記述の回答をまとめてみた。機関職員、母親ともに情報提供を希望していることから、わかりやすい情報を頻度高く希望し、センターとの交流を求めていることがわかる。したがって当センターの診断機能に加え、より情報センター的機能の充実がのぞまれよう。次いで日常の指導、訓練の機会を希望するものが、職員の方に多くあげられている。これは、地域の機関、施設職員の専門職の配置の必要性を裏付けている

表23 全国療育相談センターに対する希望

項 目	関係機関施設職員	センター利用障害児の母親
長期診断へのアプローチを	7.3%	20.7%
新しい診療科目の設置	4.9	18.9
指導・訓練の機会を	31.7	18.9
相談・情報の提供を	39.0	20.7
P・R、の必要性	17.1	15.5
センター利用の際のサービスを	0	5.2

※希望の設問に回答した者のみ

結果とも受けとられるが、職員研修の充実がのぞまれよう。情報提供の機能とともに今後の課題として熟考する必要がある。

2、3のところで述べてきたように、地域社会での受容に関する親の態度、家族関係の中での親の存在、とくに母親の生活態度との関連及び、当療育相談センターに対する反応さらに障害児の経年的傾向とあわせ考えて、地域の関係機関（専門機関）との連携のし方とくに役割機能の分化及び分担などの検討がのぞまれる。障害児の発生率、予防率、精薄的併用障害との関係での指導、訓練、義務教育化の流れの中での相談のあり方も見通しの上にたった相互関連システム化の必要性に迫られてきているのではなかろうか、地域での専門機関の充実（専門職員の配置など）と共に、家族ぐるみを中心としたアプローチがのぞまれる。

あとがき

三ヵ年間にわたる当療育センター利用障害児に限定し、診断来所時の記録の分析、追跡調査、インタビューによる現時点の問題把握障害児来所分布からみた多い地域の専門機関職員の調査と多面的にとりくみ、多大の資料となった。この報告に用いたデーターはその一部にすぎない。この貴重なデーターは、別の機会にまとめたいと願っている。

家庭および地域社会における心身障害児の生活実態に関する調査

日々ご心労の多いことと推察申し上げます。

この調査は、心身障害児をめぐる家庭や地域社会の問題を実態にもとづき検討するために行うものです。この結果は、心身障害児に関係する諸機関諸施設の今後の活動方針に役立つものと考えております。ご多忙の中、誠に恐縮ですが調査へのご協力をお願い申し上げます。なお、調査結果は統計的に処理しますので、お子さんやご家族の名前が表に出ることはありません。

心身障害児ケアー研究班

代 表 吉 沢 英 子（関東学院大学教授）

記入についてお願い

1. この調査の回答は、お母さんがなさってください。
（但し、お母さんがいらっしゃらないご家庭の場合は、障害をもったお子さんの世話を直接なさっている方をお願いします）
2. 質問に対して、あらかじめ答が用意してあるものに対しては、適当と思う答の番号（又は記号）を○で囲んでください。
3. （ ）や の中には当てはまる事柄を適宜記入してください。
4. 年齢等の算定は、昭和54年1月1日現在の時点でお答えください。

- ◇ 調査の回答をしてくださる方は 障害児の 1. 母親 2. 父親 3. 祖母 4. その他（ ） 続柄
- ◇ 現住所は 都道府県 市郡区 町村区

A

No	
----	--

B

No	
----	--

Ⅰ 障害をもったお子さんについておたずねします。(ただし、障害児が二人おられる場合はどなたか1人についてお答えください)

(1) 年令と性別 ()才 1. 男 2. 女

(2) 障害のことで初めて相談・検査を受けた場所(機関名)、その時の診断名、その時のお子さんの年令についておたずねします。

a 相談・検査を受けた場所(機関名) ()

b その時の診断名 ()

c その時の子どもの年令 ()才

(3) 現在お子さんが受けている診断名(障害名)、その診断名を受けた場所(機関名)、その時のお子さんの年令についておたずねします。

a 現在受けている診断名 ()

b その診断名を受けた場所(機関名) ()

c その時の子どもの年令 ()才

(4) 現在のお子さんの通園・通学等の状況を下の中から選んでください。

1. 施設通所 2. 施設収容 3. 普通学級通学 4. 特殊学級通学 5. 養護学校通学 6. 通勤

7. 自宅の仕事 8. 保育園・幼稚園通園 9. 自宅療養 10. 家庭保護(含、訪問学級)

11. その他()

(5) お子さんの通園・通学等に付き添いが必要ですか。

1. 必要 → いつも付き添うのはどなたですか ()

2. 必要ない

(6) 現在お子さんは通園・通学等以外で専門的な治療・訓練等を定期的に受けていますか。

1. 受けている → その機関・施設名は() → (いつから 年 月から)

2. 受けていない → その理由をお書きください。()

3. 以前受けていたが現在は受けていない

受けていた機関・施設名() → (いつから 年 月 ~ いつまで 年 月)
() → (年 月 ~ 年 月)
現在受けていない理由は何ですか ()

(7) 現在お子さんは次のいずれかの手帳をお持ちですか。

1. 身障手帳 ()種 ()級をもっている

2. 療育手帳(精神薄弱) 等級()をもっている

3. その他の手帳 名称()等級()をもっている

4. 手帳はもっていない → その理由は何ですか

(8) 現在お子さんは次のうち、どんな手当を受けていますか

- | | | | |
|---------------|----------------|----------------------|----------------|
| 1. 市町村の障害児手当金 | 2. 都道府県の障害児手当金 | 3. 特別児童扶養手当 | 4. 福祉手当 |
| 5. 児童手当 | 6. 児童扶養手当 | 7. 生活保護 | 8. 税金の控除 |
| 9. 母子年金 | 10. 母子福祉年金 | 11. 補装具・日常生活用具の給付・貸与 | 12. その他(具体的に) |
| 13. 受けていない | | | |

(9) お子さんの日常の世話は主にどなたがしますか。

1. ご主人 2. あなた 3. 子どものきょうだい 4. 祖父母 5. 家族以外の人 → (それはどなたですか)

(10) お子さんのことでホームヘルパー、ボランティア等、外部からの人的援助を受けたことがありますか。

1. 現在受けている → それはどなたですか ()

2. 現在は受けていないが、以前受けたことがある → { それはどなたでしたか ()
現在受けていない ()
理由は何ですか ()

3. 全然受けていない → その理由は何ですか ()

① お子さんの次の各項の該当する番号をそれぞれ○印で囲んでください。

a 身長……	1. 標準よりかなり高い	2. 標準よりやや高い	3. 標準	4. 標準よりやや低い
	5. 標準よりかなり低い			
b 体重……	1. 標準よりかなり重い	2. 標準よりやや重い	3. 標準	4. 標準よりやや軽い
	5. 標準よりかなり軽い			
c 食事……	1. 自立	2. やや介助必要	3. かなり介助必要	4. 全面的に介助必要
d イ着衣……	1. 自立	2. やや介助必要	3. かなり介助必要	4. 全面的に介助必要
ロ脱衣……	1. 自立	2. やや介助必要	3. かなり介助必要	4. 全面的に介助必要
e イ排尿……	1. 自立	2. やや介助必要	3. かなり介助必要	4. 全面的に介助必要
ロ ……	1. 自立	2. やや介助必要	3. かなり介助必要	4. 全面的に介助必要
f 入浴……	1. 自立	2. やや介助必要	3. かなり介助必要	4. 全面的に介助必要
g イ家庭内での移動	1. 自立	2. やや介助必要	3. かなり介助必要	4. 全面的に介助必要
ロ 家庭外での移動	1. 自立	2. やや介助必要	3. かなり介助必要	4. 全面的に介助必要
h 動き(おちつきのなさ)……	1. 非常に激しい	2. やや激しい	3. あまり激しくない	4. ほとんど動きがない
i 言語理解(周囲の人たちの言うことに対して)……	1. よく理解する	2. 少し理解する	3. あまり理解しない	4. ほとんど理解しない
j 言語での交流(本児と周囲の人たちがことばだけで意思の疎通が)……	1. よくできる	2. 少しできる	3. あまりできない	4. ほとんどできない
k 手先の器用さ……	1. 非常によい	2. ややよい	3. あまりよくない	4. 全くよくない
l 集団行動……	1. 集団に全く入れない	2. 集団にあまり入れない	3. 割合参加できる	4. 皆と一緒にいきいきと行動できる

② お子さんがかかえている問題の中で、もっとも深刻な事柄は次のうちのどれですか。一つだけ選んで該当する番号を○印で囲んでください。

1. 食事の問題	2. 着脱衣の問題	3. 排泄の問題	4. 入浴の問題	5. 移動の問題
6. ことばの問題	7. 社会性(友達つきあい)の問題	8. 知能の問題	9. 運動の問題	10. 情緒の問題
11. おちつきのなさの問題	12. その他の問題(具体的に	) 13. 特にない		

③ お子さんが今もっとも必要としていることは何ですか。次の中から一つだけ選んで該当する番号を○印で囲んでください。

1. 生活指導	2. 言語指導	3. 学習指導	4. 医学的治療	5. 心理治療	6. 機能訓練
7. 介助看護人	8. 遊び仲間	9. 遊び場	10. 地域住民の障害児に対する理解		
11. その他(具体的に					) 12. 特にない

Ⅱ ご家族やお母さんご自身についておたずねします。

(1) ご主人はこのお子さん(障害のある子)の世話をどの程度なさいますか。

1. 自発的に世話をしてくれる → どのような世話ですか
2. 頼めば世話してくれる →
3. あまり世話してくれない → その理由は
4. 全く世話してくれない → 何ですか

(2) ご主人以外の他の家族のみなさんはこのお子さんの世話をどの程度なさいますか。

1. 自発的に世話をしてくれる → どのような世話ですか
2. 頼めば世話してくれる →
3. あまり世話してくれない → その理由は
4. 全く世話してくれない → 何ですか

(3) あなたは障害のあるお子さんの世話などのために他の家族のみなさんの世話を十分にはできないとお考えですか。

1. 他の家族の世話も十分している 2. 十分とはいえないがまあまあ世話している
3. あまり世話ができない 4. ほとんど世話できない

(4) 障害のあるお子さんに対するご主人や家族のみなさんの態度や協力についてあなたは満足していますか。

a. 障害児に対するご主人の態度協力について

1. 非常に満足している 2. まあまあ満足している 3. やや不満に思う 4. 非常に不満に思う

b. 障害児に対するその他の家族の方たちの態度協力について

1. 非常に満足している 2. まあまあ満足している 3. やや不満に思う 4. 非常に不満に思う

(5) 家族の中に障害児がいるということが次に挙げたことに対してどの程度のマイナス、あるいは不利な影響を与えていると思いますか。

a. ご主人の仕事に対して

1. 非常にマイナスになると思う → 具体的にどんなマイナスになるとお考えですか
2. 少しマイナスになると思う
3. あまりマイナスになるとは思わない
4. 少しもマイナスになるとは思わない

b. ほかにのお子さん(家族)の将来に対して

1. 非常にマイナスになると思う → 具体的にどんなマイナスになるとお考えですか
2. 少しマイナスになると思う
3. あまりマイナスになるとは思わない
4. 少しもマイナスになるとは思わない

c. 家族内の人間関係の結びつきに対して

1. 非常にマイナスになると思う → 具体的にどんなマイナスになるとお考えですか
2. 少しマイナスになると思う
3. あまりマイナスになるとは思わない
4. 少しもマイナスになるとは思わない

d. 親類・知人と付き合いなどに対して

1. 非常にマイナスになると思う → 具体的にどんなマイナスになるとお考えですか
2. 少しマイナスになると思う
3. あまりマイナスになるとは思わない
4. 少しもマイナスになるとは思わない

(6) あなたは障害をもったお子さんに関して、ご主人にどんな役割を果してもらいたいと思いますか。下の中から一つだけ選んで、該当する番号を○印で囲んでください。(ご主人がいらっしゃらない場合は家族の方に望む役割)

1. 障害児に対する直接的な世話や介助
2. 障害児以外の家族員の世話や援助
3. あなたご自身に対しての精神的な支えや理解
4. しっかり稼いでくれること。
5. 家庭外の雑務処理や付合い。
6. その他(具体的に)
7. 現在のままで満足しているので特に望むことはない。

(7) 障害をもつお子さんをめぐって、あなたは次のうちのどれを特に望みますか。一つだけ選んで該当する番号を○印で囲んでください。

1. 子どもの症状や見通しについて知りたい。
2. 障害（児）のことで相談・指導してくれる専門家がほしい。
3. 障害児に対する社会一般のよりよい理解がほしい。
4. 障害児のための施設・設備がほしい。
5. 障害児のために友達がほしい。
6. 障害児の世話を援助してくれる人がほしい。
7. 親同士で話し合える場や機会がほしい。
8. 家族の協力や理解がほしい。
9. その他（具体的に_____）

(8) あなたが今いちばんしたいことは何ですか。一つだけ選んで該当する番号を○印で囲んでください。

1. ゆっくり眠りたい。
2. 里帰りをしたい。
3. クラス会に出たい。
4. 趣味を楽しみたい。
5. 歯を治したい。
6. おしゃれをしたい。
7. ゆっくり風呂に入りたい。
8. 気の合う友達とゆっくりおしゃべりしたい。
9. 旅行をしたい。
10. 独りになりたい。
11. 音楽会や映画に行きたい。
12. 職につきたい。
13. その他（具体的に_____）

Ⅲ 地域社会や近所の人たちとの関係についておたずねします。

(1) あなたは隣近所に気軽に物を頼んだり往き来できる人がいますか。

1. いる → その方はどんな関係の人ですか _____
2. いない

(2) 突発的な事故や急用が生じた場合、あなたは誰に手伝いや応援を頼みますか。（ご主人以外に）

1. ご主人の親・きょうだい
2. あなたの親・きょうだい
3. 近所の人
4. 近所以外の友人や知人
5. その他（誰ですか _____）
6. 特にいない

(3) あなたはお子さんの障害に関連した親の会に入っていますか。

1. 入っている → その会でのあなたの役割は何ですか（具体的に _____）
2. 現在入っていないが以前入っていた → 現在入っていない理由は何ですか（ _____）
3. 現在入っていないが将来入りたい → 入りたい理由は何ですか（ _____）
4. 以前も現在も入っていない → その理由は何ですか（ _____）

(4) あなたは現在、親の会以外の団体、クラブ、サークル、会、教室等の何かに入っていますか。

1. 入っている _____
2. 現在入っていないが以前入っていた → それはどんなグループですか、下の表にご記入ください。
3. 現在入っていないが将来入りたい _____
4. 以前も現在も入っていない

グループ名	活 動 内 容	メンバー数	活動回数(月に)
		約()人	約()回
		約()人	約()回
		約()人	約()回
		約()人	約()回

Ⅱ. ご家族について次の欄にご記入ください。

注：1) 職業分類は下記の内容に従って欄内の番号を○でかこんでください。

2) 続柄は障害児を中心としてご記入ください。尚、障害児の続柄は本児とお書きください。

3) 信仰の欄は日頃の生活がそれによって支えられている場合のみに○と記入してください。

4) 当該児以外に障害児（者）がいる場合はその人の続柄を○でかこんでください。

続柄	年令	同・別居	職 業		学 歴	健 康 状 態	信 仰	障害児に対する 面倒見の程度	障害児と接する 時間(1日の中で)
			分 類	具体的内容を記入					
父	才	1. 同居 2. 別居	1. 2. 3. 4. 5.			1. 良 2. 否	1. 有 2. 無	1. よい 2. 普通 3. あまりよくない	およそ()時間
母	才	1. 同居 2. 別居	1. 2. 3. 4. 5.			1. 良 2. 否	1. 有 2. 無	1. よい 2. 普通 3. あまりよくない	およそ()時間
		1. 同居 2. 別居	1. 2. 3. 4. 5.			1. 良 2. 否	1. 有 2. 無	1. よい 2. 普通 3. あまりよくない	およそ()時間
		1. 同居 2. 別居	1. 2. 3. 4. 5.			1. 良 2. 否	1. 有 2. 無	1. よい 2. 普通 3. あまりよくない	およそ()時間
		1. 同居 2. 別居	1. 2. 3. 4. 5.			1. 良 2. 否	1. 有 2. 無	1. よい 2. 普通 3. あまりよくない	およそ()時間
		1. 同居 2. 別居	1. 2. 3. 4. 5.			1. 良 2. 否	1. 有 2. 無	1. よい 2. 普通 3. あまりよくない	およそ()時間
		1. 同居 2. 別居	1. 2. 3. 4. 5.			1. 良 2. 否	1. 有 2. 無	1. よい 2. 普通 3. あまりよくない	およそ()時間

注 1. 自営業（非雇用） 2. 会社員 3. 公務員 4. その他 5. 無 職

V 最後に、全国療育相談センターについてご意見をおきかせください。

(1) 全国療育相談センターの療育指針はあなたにとって役に立ちましたか。

1. とても役に立った → どんな風に役立ちましたか
2. 少し役に立った
3. あまり役に立たなかった → それは何故でしょうか
4. 全く役に立たなかった

(2) 当センターで再度、診察や相談を希望なさいますか。

1. 希望する → その理由は何ですか
2. 希望しない

(3) 当センターに対して望むこと、不満なことがありましたらおきかせください。

()

◆ ご協力ありがとうございました。ご意見がありましたら何でもおきかせください。

()

連絡・問い合わせ先

全国療育相談センター福祉相談室
孤 嶋 圭 子

東京都新宿区西早稲田 2-2-8
電話 03(203)1211 内線 21

調査にご協力のおねがい

昭和54年7月

心身障害児ケア研究会

代表 吉 沢 英 子（関東学院大学教授）

皆様に

私どもは、全国療育相談センターに来所された方々に対して51年度より追跡調査を実施し、今年度は3年目にあたります。今回は、当センターに来所者を紹介くださった機関や団体、施設、個人の方々に、別紙のような調査をお願いするはこびになりました。その結果は、当センターの評価をふくめ、広地域社会へのかかわり方の如何を考察、検討したいと思っております。公私ご多忙のことと存じますが何卒ご協力のほど切にお願い申し上げます。

★記入に際してのおねがい

1. この調査の回答は個人的見解でご記入ください。
2. 回答のための選択肢が用意されている質問には適当と思われる回答の番号を○で囲んでください。
3. 自由回答の場合、()又は の箇所は自由に記入してください。
4. (M.A)と記してある質問の回答は複数回答でもよいことをあらわしています。

★調査用紙返送に関して

1. 期日は8月5日までにご記入くださり、同封の封筒に入れポストに差出してください。
2. 調査に関するお問い合わせは下記をお願いします。

162 東京都新宿区西早稲田2-2-8 全国療育相談センター内 孤嶋圭子宛

電話 03-203-1211 (代表)

心身障害児に関する調査Ⅱ

記入年月日 月 日

Q 1. あなたはどんなことから当全国療育相談センター（以下当センターとする）をお知りになりましたか。次の項目の中から適当なものの番号に○印をつけてください。(M.A)

- | | |
|----------------------|-----------------------------|
| 1. 「療育の窓」の購読によって | 2. 知人、友人から知らされて |
| 3. 新聞、テレビ、その他の情報によって | 4. 講演会、研修会、その他の集会に参加して |
| 5. 来所したことから | 6. その他 <input type="text"/> |

Q 2. あなたのまわりに（職場を含む）当センターを知っている人がいますか。

1. いない 2. いる 3. わからない

→SQ 2-1. その方はどんな立場の人ですか。

Q 3. あなたご自身、当センターに来所したことがおありですか。

1. よく来所する 2. 1～2回来所したことがある 3. ない

↓ SQ 3-1. どんなことで来所されますか。（ましたか。）(M.A)

- | | | |
|--------------|--------------|----------------------|
| 1. 相談、受診のために | 2. 見学及び研修会等で | 3. ケース（受診者、相談）のつきそいで |
| 4. 研究会のため | 5. その他() | |

1. 親戚、縁者……………()人 2. 知人、友人関係……………()人
3. 担当のケース及び患者の関係……………()人 4. その他()……………()人

1. 受けていない 2. たまに受ける 3. よく受けている 4. その他()

--	--

1. 総合診断が得られるから
2. 著名な専門家に相談ができるから
3. 当センターの職員に友人、知人がいるから
4. 近隣に類似施設がないから
5. その他()

1. うけた 2. 全くうけなかった 3. その他()

--

--

--

F1. あなたの住所は

都府 道県	市区 郡	町区 村

F2 あなたの年齢及び性別は 才 男・女

F 3. あなたは現住地に居住して何年になりますか。	年目
----------------------------	----

F4 あなたの勤務先の名称は

→ 職種名は

その職場に勤務して何年になりますか。	年目
--------------------	----

— 112 —

親に対するインタビュー項目

氏名	男・女	生年月日 年 月 日	年齢 歳
----	-----	---------------	---------

※

※印のところは記入しないでください。

(1) 現在のお子さんの通園・通学等の状況を下の中から選んでください。

1. 在宅で通園、通学、通所、通勤等	具体的に：
2. 在宅で訪問教師	
3. 在宅のみ	
4. 収容施設入所中、病院入院中	

(2) 全国療育相談センターに来所される以前に行かれた医療機関についてお尋ねします。

いくつかの時	どこで	何を	その時の診断名	その時助言指導が	その時感じたのは
				あった なかった	満足 まあまあ 不満足
				あった なかった	満足 まあまあ 不満足
				あった なかった	満足 まあまあ 不満足
				あった なかった	満足 まあまあ 不満足
				あった なかった	満足 まあまあ 不満足

※

(3) 相談相手についておたずねします。

1. 現在、あなたには、相談できる専門機関や専門家がありますか。

i ある。→	具体的に	→	※
ii ない。		→	

2. 現在あなたには、専門機関や専門家以外に、相談をする相手がありますか。

i ある。→	具体的に	→	※
ii ない。		→	

(4) 現在かかえている問題はどんなことですか。

	→	※
--	---	---

(5) センター来所をめぐって〔来所時期〕

1) 来所の動機

--

2) 受診結果

① 診断・所見（どう告げられたか）

--

② 感想

--

③ センターに希望すること

--

(6) 地域・近隣関係

① 障害児に対しての地域近隣の態度（どう感じているか）

--

② 何を望むか

--

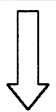
③ 地域に対してあなたは何をすべきか。（自分がどのように働きかけているのか）

--



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

昭和 52 年度から 3 か年間に及ぶ調査研究で全国療育相談センター開設以来 52 年度に至る 1095 ケースを 来所当時の相談資料を分析しその傾向をつかみ その 1095 ケースを母集団として、質問紙記入法による調査用紙を郵送し記入後返送、回収率 58.9%, その結果分析を行った、さらに当センター利用者の地区的分布分析を試み、来所児の多い地域を三か所選定、その地域内の障害児の親、74 ケースにインタビューを行った。それに加えてその地域内の専門機関として福祉、教育、医療その他個人に対し郵送による質問紙記入法による当センター認知度、紹介したケースとの関係及現在のかかわり方などの調査を行った。283 ケ所を対象として、回収率は 47.9%で福祉関係の回収率が最も高く 54%であった。

今回の報告は、これらの前回までの調査分析と関連させ、またその結果をふまえながら総合的にコメントを加えつつまとめとしたい。この諸調査研究の目的は、障害児のある年齢時における診断判定に基づいて療育指針を得て後の状況把握、経年的な変化にともなって表面化してくる問題点を、障害児自身による個人要因、障害児をめぐる家族要因、家族をふくめて地域社会とのかかわり上問題となる社会要因の側面から検討しその実態を把握することにあった。またその実態把握とあわせて総合的診断機関としての当療育相談センターのあり方、今後の課題について明らかにすることを目的としている。即ち、コミュニティ・ケアを推進していくための具体的な資料として、福祉、教育、医療の密接な関連性を保持し、トータルな処遇展開の発端を見出したい。

尚、52 年度、53 年度に報告した内容を省き障害児の親に対する調査結果を次のクロスの柱立てによって分析した要約と専門機関を対象にした調査結果分析を加えて紙数の許される範囲で述べることとする。